資 料

青年におけるナルシシズム（自己愛）的傾向と 親の養育態度・家庭の雰囲気との関係

宮 下 一 博*

A STUDY ON NARCISSISTIC PERSONALITY TRAITS OF ADOLESCENTS

Kazuhiro MIYASHITA

The purposes of the present paper were to examine the relations of narcissistic personality to Ss' present recollections concerning their parents' earlier attitudes and home environment. The Narcissistic Personality Inventory (NPI) revised by Miyashita and Kamiji (1985), and three other questionnaires measuring mother's and father's attitudes together with the home environment were administered to 270 college students. Correlations were performed between NPI scores and the other three measures. The results showed that in case of females, a significant negative correlation was found between narcissism and the emotional acceptance of the mother : such result supported the theory of narcissism. In the case of male subjects a significant positive correlation was found between narcissism and the father's dominating attitude. With such a result, it was suggested that the father could not be neglected in the theory of narcissism.

Key words : Narcissistic Personality Inventory, mother's and father's attitudes, acceptance of mother.

問題と目的

ナルシシズム（自己愛）に関する研究は、従来は主として精神分析的観点からの理論的研究がその中心であった。古くは、Freud (1914) などが、また近年では、Kernberg (1975, 1980), Kohut (1971, 1976) らが、いわゆるナルシシズムの病理を中心に、その理論構築や臨床実践を行ってきた。こうした研究の紹介は、宮下・上地 (1985) や中西・佐方 (1986) に譲るが、ナルシシズムの概念を明確にすべく多くの研究が積み重ねられてきた。その一方で、「ナルシシズム」というものを心理検査や質問紙により実証的に捉えようとする研究も盛んになりつつあり、心理検査の代表として、ロールシャッハ・テスト (Exner, 1969 ; Harder, 1979 など) や

TAT (Grayden, 1958 ; Harder, 1979 など) も利用され始めた。また、Raskin & Hall (1979) による NPI (Narcissistic Personality Inventory) の発表は、ナルシシズムの測定的研究を助長させ、正常人をも対象とする数多くの実証的研究を生み出す 1 つの契機となった。幾つか例を挙げても、Emmons (1981, 1984, 1987), Auerbach (1984), Joubert (1986), Raskin & Terry (1988), Raskin & Novacek (1989) など、その研究の数だけを見ても重要な研究の 1 つとして位置づけられる。

我国においても、この NPI に刺激されたかたちで幾つかの研究が登場するようになった。宮下・上地 (1985), 大石 (1987, 1988, 1989), 佐方 (1987, 1988), 大平 (1988, 1989) などがそれである。これらの研究は、NPI の信頼性や妥当性の検討を始め、共感性や不安、種々の性格検査との関連を検討することにより自己愛的人格**の特徴を明確にしようとする研究である。このよ

* 千葉大学 (Chiba University)

うな研究の中で、NPI は少しずつ姿を変えてきている（例えば、宮下・上地（1985）では、Raskin & Hall（1979）の二者択一法を7段階評定に、佐方（1986）では5件法にそれぞれ回答方法を修正している）とはいえ、今やNPIは、青年期における自己愛的人格を研究する上で、欠くことのできなない1つの測定具になるに至った。

ところで、Kernberg（1975）は、病理的なナルシズムの特徴として、過度の自己陶醉、強烈的な野心、誇大な空想、賞賛に対する過剰依存、栄光や権力・美を求める絶え間ない欲望などを挙げている。そして、こうした特徴は、愛する能力の欠如、共感性の欠如、慢性的な空虚感、他者に対する搾取などのかたちで顕在化すると述べている。これまでのNPIを用いた様々の研究から、自己愛的人格傾向の強い者ほど、エネルギーで外向的、自信家、自己本位、競争的、攻撃的であり、共感性に乏しいことなどが明らかにされているが、これらは、先のKernbergの述べる特徴とよく符合するように思われる。一方、Kernberg（1975）は、このようなナルシズムが生まれる要因として、幼少期に冷淡で共感性のない母親によって情緒的な飢餓状態に置かれたことを指摘している。この点については、Kohut（1971）もほぼ同様の指摘を行っている。

このように、ナルシズムの原因については、ある1つの視点から明確な指摘がなされているにもかかわらず、この点に焦点を当てた実証的研究はほとんど見られないのが実態である。このことは、「幼少期」の定義の曖昧さもさることながら、その測定の難しさも1つの要因になっているのであろう。

そこで、本研究では、探索的にこの点に焦点を当ててみたいと思う。この点を検討する方法としては、次の2つを考えることができる。その第1は、青年の母親に、子どもの幼少期における関わり方を回想してもらうこと、第2は、青年自身に母親の自分に対する態度を回想して自己報告してもらうことである。この前者の方法については、現在、研究を進めている最中であり、次報以降に取り扱う予定である。さて、本研究では、後者の方法により研究を行うが、青年に自己の幼少期の母親を回想させるというのはかなりの困難が伴う。ナルシズムの理論で定義される「幼少期」というものは、せいぜい2～3歳頃であり、その時期ま

で遡るのはかなり難しいと言わざるを得ない。そこで、本研究では、これまでの母親の養育態度を包括的に回想してもらうという方法をとった。本研究で扱うのは、その多くが正常青年であることを考えれば、母親の養育態度に幼少期からの一貫性を想定することは、それほど無理はないように思われる（但し、この点については、後の研究により実証的に確認される必要がある）。また、本研究では、母親の養育態度以外に、父親の養育態度ならびに家庭の雰囲気についても取り挙げた。ナルシズムの理論では、母親が強調されているが、父親をも含めた家族全体の存在というものも当然考察されるべきであろう。

以上の問題意識に基づき、本研究では、青年の自己愛的人格傾向と母親、父親の養育態度、家庭の雰囲気との関係を検討することを目的とした。

方 法

被験者 国立C大学3年生（青年心理学受講生）、男子110名、女子160名（いずれも有効数）の合計270名。

質問紙 (1) NPI***（Raskin & Hall, 1979をもとに宮下・上地, 1985 が作成した35項目。なお、これらには34のダミー項目が加えられランダムに配置されている。7段階評定）

(2) 母親・父親の養育態度を測定する質問紙（Schaefer, 1965を参考に筆者が作成した、TABLE 1に示す30の項目対。母・父別に評定。7段階評定）。

TABLE 1 母・父の養育態度を測定する項目

No	項 目	No	項 目
1	自律性を尊重する—尊重しない	16	無視する—重視する
2	開放的な—閉鎖的な	17	いい加減な—きちんとした
3	肯定的な—否定的な	18	公平な—不公平な
4	意欲的な—無気力な	19	やさしい—冷たい
5	でしゃばりな—謙虚な	20	拘束的な—解放的な
6	口うるさい—もの静かな	21	意地の悪い—お人よしの
7	いらいらした—落ち着いた	22	厳しい—甘い
8	無関心な—熱心な	23	感情的な—理性的な
9	信頼する—信頼しない	24	ばらばらな—一貫した
10	個性を尊重する—尊重しない	25	平等な—不平等な
11	支持的な—支持的でない	26	にこやかな—無表情な
12	子供中心の—大人中心の	27	保護的な—自由な
13	指示的な—非指示的な	28	統制的な—非統制的な
14	こせこせした—おうような	29	しつこい—さっぱりした
15	安定した—不安定な	30	拒否的な—受容的な

*** Raskin & Hall（1979）の原法をかなり修正したが、同様にNPIという名称を用いた。その作成の手続については、宮下・上地（1985）を参照のこと。

** 質問紙を利用した自己愛ないし自己愛的人格の研究では、病理的なナルシズムも正常範囲のそれも連続線上のものとして扱わざるを得ない。つまり、質問紙研究では、その人格の程度を問題にしていくのであり、本稿では、「自己愛的人格傾向」という言葉も数多く用いている。

(3)家庭の雰囲気を測定する質問紙（長島ら, 1967 による 47 項目の形容詞対。7 段階評定）。

なお、上記の (2), (3) の項目は、宮下・小林 (1984) においても利用され一応の構造化がなされているが、その時の被験者数の制限に基づく因子構造の不安定性なども考慮し、本研究では、再度それらの構造についての分析も行った。

実施方法 上述の 3 種の質問紙を授業時間を利用して集团的に実施した。その際、「母親・父親の養育態度」や「家庭の雰囲気」については、自分の生活史を振り返り総合的に回答するよう指示を行った。

実施時期 1989 年 4 月中旬及び 10 月初旬。

結果の処理法

(1)NPI の処理法：NPI を構成する 35 項目について、自己愛的傾向が強いほど高得点となるようにそれぞれ 7 ～ 1 点を付与し、総得点を算出した。

(2)母親・父親の養育態度を測定する質問紙の処理法：TABLE 1 に示す項目対について、左側の傾向が強いほど高得点となるよう各項目に 7 ～ 1 点を付与し、父親、母親別に主因子解による因子分析を行った。そして、父親、母親とも固有値 2.0 以上の 3 因子を抽出し、これにヴァリマックス回転を施した。1 つの因子にのみ絶対値 .40 以上の負荷を有することを条件に、単純構造をなす項目の選択を行い、結果の概要を、TABLE 2 と TABLE 3 に示した。それに基づいて、各因子の解釈を行うと、まず、母親の養育態度 (TABLE 2) については、第 1 因子 (F1) は、「情緒的支持・受容」、第 2 因子 (F2) は、「情緒不安定」、第 3 因子 (F3) は、「支配・介入」、次に、父親の養育態度 (TABLE 3) では、F1 は、「情緒的支持・受容」、F2 は、「情緒不安定」、F3 は、「支配・介入」とそれぞれ命名された。なお、寄与率の合計は、母親、父親それぞれ 51.34%、56.15% であり、分散の説明率は十分であろうと思われる。

以下、母親、父親ごとに、各因子とも単純構造をなす項目の総得点を算出した。

(3)家庭の雰囲気を測定する質問紙の処理法：「母親・父親の養育態度」を測定する質問紙と同様に、各項目に 7 ～ 1 点を付与し、主因子解による因子分析を行い、固有値 2.0 を基準に 3 因子を抽出、これにヴァリマックス回転を施した。1 つの因子にのみ絶対値 .40 以上の因子負荷を有することを条件に、単純構造をなす項目を整理したものが、TABLE 4 である。それによれば、F1 は、「冷淡・厳格」、F2 は、「不誠実・無秩序」、F3 は、「内閉・謙虚」とそれぞれ解釈され、各々単純構造をなす項目の総得点を算出した。なお、3 因子によ

TABLE 2 母親の養育態度を測定する項目の因子構造

項 目	F1	F2	F3	h ²
公平な—不公平な	.716	-.342	-.106	.641
無視する—重視する	-.710	-.100	.008	.514
やさしい—冷たい	.700	-.218	-.175	.569
平等な—不平等な	.676	-.326	-.074	.569
にこやかな—無表情な	.665	-.168	-.144	.492
支持的な—支持的でない	.655	-.113	-.287	.524
いい加減な—きちんとした	-.633	.245	-.319	.567
信頼する—信頼しない	.628	-.089	-.352	.526
意欲的な—無気力な	.615	.329	-.050	.489
拒否的な—受容的な	-.609	.128	.264	.457
意地の悪い—お人よしの	-.553	.243	.182	.398
子供中心の—大人中心の	.455	-.135	-.210	.270
こせこせした—おうような	-.419	.371	.396	.471
でしゃばりな—謙虚な	.048	.774	.293	.687
感情的な—理性的な	-.167	.757	.136	.620
口うるさい—もの静かな	.007	.751	.275	.640
いらいらした—落ち着いた	-.338	.676	.202	.613
しつこい—さっぱりした	-.297	.509	.348	.469
拘束的な—解放的な	-.247	.219	.741	.658
統制的な—非統制的な	-.011	.162	.690	.502
自律性を尊重する—尊重しない	.290	-.244	-.665	.586
開放的な—閉鎖的な	.372	.077	-.647	.563
指示的な—非指示的な	.194	.310	.524	.408
保護的な—自由な	.023	.329	.522	.382
厳しい—甘い	-.118	.048	.464	.231
寄与率 (%)	22.54	14.11	14.69	51.34

TABLE 3 父親の養育態度を測定する項目の因子構造

項 目	F1	F2	F3	h ²
やさしい—冷たい	.751	-.343	.022	.682
無視する—重視する	-.695	.160	-.240	.566
意欲的な—無気力な	.694	-.061	.326	.591
にこやかな—無表情な	.677	-.081	-.019	.466
支持的な—支持的でない	.648	-.227	-.280	.550
拒否的な—受容的な	-.633	.266	.254	.536
信頼する—信頼しない	.625	-.327	-.252	.561
意地の悪い—お人よしの	-.606	.336	.195	.518
子供中心の—大人中心の	.570	-.141	-.233	.399
肯定的な—否定的な	.554	-.305	-.391	.552
個性を尊重する—尊重しない	.552	-.385	-.283	.533
自律性を尊重する—尊重しない	.439	-.350	-.393	.470
感情的な—理性的な	-.067	.791	.081	.636
ばらばらな—一貫した	-.255	.772	-.139	.681
いらいらした—落ち着いた	-.272	.761	.250	.716
安定した—不安定な	.395	-.627	-.149	.572
統制的な—非統制的な	-.119	.060	.790	.642
拘束的な—解放的な	-.298	.165	.765	.702
保護的な—自由な	-.022	.053	.660	.439
指示的な—非指示的な	-.004	.229	.604	.418
寄与率 (%)	25.49	15.80	14.86	56.15

る寄与率の合計は47.05%であり、十分な値と判断された。

結果と考察

NPI 得点と「母親の養育態度」、「父親の養育態度」、「家庭の雰囲気」のそれぞれ3つの「単純構造をなす項目の総得点」との相関係数を男女別に算出し、TABLE 5 に示した。

1. 自己愛的人格と母親の養育態度

TABLE 5 より、女子においてのみ、「情緒的支持・受容」の因子とは負の、また、「情緒不安定」の因子とは正のそれぞれ有意な相関が見られた。これらの結果は、

TABLE 4 家庭の雰囲気を測定する項目の因子構造

項 目	F1	F2	F3	h ²
角のあるー丸い	.786	.061	.167	.650
おだやかなー激しい	-.744	-.062	.173	.587
暖かいー冷たい	-.742	-.255	-.239	.672
自分勝手なー思いやりのある	.685	.345	.085	.595
気持ちいいー気持ち悪い	-.680	-.278	-.367	.675
厳しいーやさしい	.665	-.175	-.006	.472
素直なー強情な	-.637	-.122	-.137	.440
短気なー気長な	.623	.149	-.015	.410
感情的なー理性的な	.517	.177	-.223	.349
信じ易いー懐疑的な	-.462	.061	-.239	.275
かたいーやわらかい	.462	-.369	.349	.471
不注意なー注意深い	.060	.762	-.074	.590
きちんとしたーだらしない	-.275	-.738	.042	.623
まじめなーふまじめな	-.052	-.709	.150	.527
慎重なー軽率な	-.220	-.707	.133	.566
勤勉なー怠惰な	.084	-.691	-.113	.497
無能なー有能な	.224	.640	.284	.540
不正確なー正確な	.223	.596	.050	.407
不潔なー清潔な	.254	.573	.109	.405
物覚えのよいー忘れっぽい	-.002	-.414	-.078	.177
外向的なー内向的な	-.289	-.096	-.710	.597
孤独なー社交的な	.385	.145	.658	.601
ひかめめなーでしゃばりな	-.169	-.164	.647	.474
無口なーおしゃべりな	.350	.055	.646	.543
個性のないー個性的な	-.083	.093	.614	.393
小心なー大胆な	.022	.279	.548	.379
臆病なー勇敢な	.116	.361	.528	.422
冷静なー情熱的な	-.003	-.103	.519	.280
派手なー地味な	.087	.181	-.511	.301
内面的なー外面的な	.056	-.130	.415	.192
寄与率 (%)	17.67	15.72	13.66	47.05

TABLE 5 NPI 得点と「母親・父親の養育態度」及び「家庭の雰囲気」との関係

		男 (N=110)	女 (N=160)
母親の養育態度	F1(情緒的支持・受容)	-.055	-.165*
	F2(情緒不安定)	-.005	.157*
	F3(支配・介入)	.126	-.093
父親の養育態度	F1(情緒的支持・受容)	-.135	.134*
	F2(情緒不安定)	.046	-.076
	F3(支配・介入)	.201*	.061
家庭の雰囲気	F1(冷淡・厳格)	.077	.163*
	F2(不誠実・無秩序)	-.174*	-.092
	F3(内閉・謙虚)	-.164*	-.216**

** p<.01 * p<.05 + p<.10

これまでの理論的研究の枠組みをほぼ実証的に検証する結果と言えよう。即ち、女子の場合、母親の暖かい受容的態度が自己愛的傾向を抑制するかたちで、また、感情的であったり情緒不安定であるような、いわゆる否定的な養育態度はこれを増長させると考えうる結果が得られた。男子において、有意な関連が認められなかったのは、自己愛的人格の形成における性差を示すものかも知れない。これまでの自己愛的人格の研究では、このような性差については殆ど検討されておらず、今後、さらに研究を続ける中で徐々に結論が下されるであろう。

2. 自己愛的人格と父親の養育態度

TABLE 5 によれば、男子では第3因子、即ち、「支配・介入」の養育態度と自己愛的人格得点との間に正の有意な相関が得られた。また、女子においては、「情緒的支持・受容」の因子との間に正の有意な傾向が認められた。つまり、男子では、幼少期からの父親の養育態度が支配・介入のと認知するほど、女子では、暖かく受容的であると認知するほど、自己愛的人格得点が有意に高い(あるいはその傾向)という結果が得られた。このうち、女子の結果は若干意外な結果ともいえるが、男子では、ある意味で予想される結果が得られた。

これまでの自己愛に関する理論的研究では、母親が強調されてきたが、父親との関係も無視できない部分があろう。本研究の結果では、父親の支配・介入というある種の否定的な養育態度は、男子においてのみ有意な関連が認められた。女子においては、男子に比べ、自己愛的人格傾向に及ぼす父親の影響は弱いといえるが、情緒的支持・受容の養育態度が自己愛的傾向と正の関係(傾向)が認められたことは興味を持たれる点で

ある。先の母親の結果をも合わせて考えると、女子では、受容的な母親は自己愛的傾向を抑制するものの、父親のそうした傾向は、むしろそれを促進させるということになる。

全体的に考えれば、自己愛的人格との関係においては、男子では父親の否定的な養育態度が、女子では母親のそうした態度が強い関連を有するといつてよいかも知れない。このような結果は、一部理論的に妥当なものといえようが、父親については未知の点が残されており、今後さらに研究の蓄積が必要であろう。

3. 自己愛的人格と家庭の雰囲気

TABLE 5 の家庭の雰囲気について見ると、男子では、第2, 第3因子, 即ち, 「不誠実・無秩序」, 「内閉・謙虚」とそれぞれ負の有意な傾向が認められた。また、女子では、第1因子（冷淡・厳格の因子）とは正の, 第3因子（内閉・謙虚の因子）とは負のそれぞれ有意な相関が得られた。

男女とも, 「内閉・謙虚」の因子と負の有意な相関（あるいは傾向）が認められたが、これは逆に言えば、自己愛的人格傾向の高い者の家庭のあり方として、外向的で活発、大胆、派手などの特徴を読みとることができ、これらは自己愛的人格そのものの特徴ともかなりの点で一致するものであろう。また、女子において, 「冷淡・厳格」の因子と正の有意な相関が得られたことは、家庭全体のあり方についても、冷ややかで厳格な家庭というものが自己愛的人格傾向を助長させる（あるいは生み出す）ことを示しており、自己愛的人格の背景として、単に母親のみならず、父親をも含めた家庭全体を問題にする必要があることを示唆しているようにも思われる。

引用文献

- Auerbach, J.S. 1984 Validation of two scales for narcissistic personality disorder. *Journal of Personality Assessment*, 48, 649—653.
- Emmons, R.A. 1981 Relationship between narcissism and sensation-seeking. *Psychological Reports*, 48, 247—250.
- Emmons, R.A. 1984 Factor analysis and construct validity of the Narcissistic Personality Inventory. *Journal of Personality Assessment*, 48, 291—300.
- Emmons, R.A. 1987 Narcissism : Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 11—17.
- Exner, J.E. 1969 Rorschach responses as an index of narcissism. *Journal of Personality Assessment*, 33, 324—330.
- Freud, S. 1957 On narcissism : An introduction. In J. Strachey (Ed. and Trans.), *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud* (Vol. 14, Pp. 73—102). London : Hogarth Press. (Original work published 1914)
- Grayden, C. 1958 The relationship between neurotic hypochondriasis and three personality variables : Feeling of being unloved, narcissism, and guilt feelings. *Dissertation Abstracts International*, 18, 2209—2210.
- Harder, D.W. 1979 The assessment of ambitious narcissistic character style with three projective tests : The early memories, TAT, and Rorschach. *Journal of Personality Assessment*, 43, 23—32.
- Joubert, C.C. 1986 Social interest, loneliness, and narcissism. *Psychological Reports*, 58, 870.
- Kernberg, O. 1975 *Borderline conditions and pathological narcissism*. New York : Jason Aronson.
- Kernberg, O. 1980 *Internal world and external reality*. New York : Jason Aronson.
- Kohut, H. 1971 *The analysis of the self*. New York : International Universities Press.
- Kohut, H. 1976 *The restoration of the self*. New York : International Universities Press.
- 宮下一博・上地雄一郎 1985 青年におけるナルシズム（自己愛）的傾向に関する実証的研究(1) 総合保健科学, 1, 51—61.
- 宮下一博・小林利宣 1984 疎外感と幼少期の家庭環境及び自己概念との関係 広島大学教育学部紀要, 33, 141—147.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斉藤耕二・堀洋道 1967 自我と適応の関係についての研究(2)—Self-Differentialの作製— 東京教育大学教育学部紀要, 14, 59—83.
- 中西信男・佐方哲彦 1986 ナルシズム時代の人間学 福村出版
- 大平英樹 1988 自己愛人格と不安の関係—自己愛人格目録(NPI)の検討— 日本心理学会第52回大会発表論文集, 110.

- 大平英樹 1989 自己愛人格における怒りの感情と攻撃的行動 —生理的喚起の促進作用に着目して— 日本心理学会第53回大会発表論文集, 154.
- 大石史博 1987 ナルシシズム的人格に関する研究(2) —YG 性格検査との関係について— 日本心理学会第51回大会発表論文集, 535.
- 大石史博 1988 ナルシシズム的人格に関する研究(3) —CMI, MMPI との関係について— 日本心理学会第52回大会発表論文集, 109.
- 大石史博 1989 ナルシシズム的人格に関する研究(4) —共感性との関係について— 日本心理学会第53回大会発表論文集, 155.
- Raskin, R., & Hall, C.S. 1979 A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Raskin, R., & Novacek, J. 1989 An MMPI description of the narcissistic personality. *Journal of Personality Assessment*, **53**, 66—80.
- Raskin, R., & Terry, H. 1988 A principal components analysis of the Narcissistic Personality Inventory and future evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 890—902.
- 佐方哲彦 1986 自己愛人格の心理測定 —自己愛人格目録(NPI)の開発— 和歌山県立医科大学進学課程紀要, **16**, 77—86.
- 佐方哲彦 1987 自己愛人格目録(NPI)の妥当性に関する研究 —Y-G 検査および MPI, MMPI との相関から— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 538—539.
- 佐方哲彦 1988 同一性拡散の心理的特徴の一側面 —自己愛傾向および共感性との関連— 日本心理学会第52回大会発表論文集, 108.
- Schaefer, E.S. 1965 Children's report of parental behavior : An inventory. *Child Development*, **36**, 413—424.

(1991年5月27日受稿)